紫の伝説

終章 その六

古川益三

相対性因果論とでもいうのだろうか

因があるから果がある
その果がまた因となり
因は果を生じ 次々とめぐり行く

あなたと
同じ処を
望んで
おります
すべての事物事象には
因がある

まだ まだ
因のないものは 存在しない
存在できない
あたり前の 話しだ

因なくして生ずるものがあるだろうか
そんなもの　あるわけがない

あの丘を越えて行くがいい

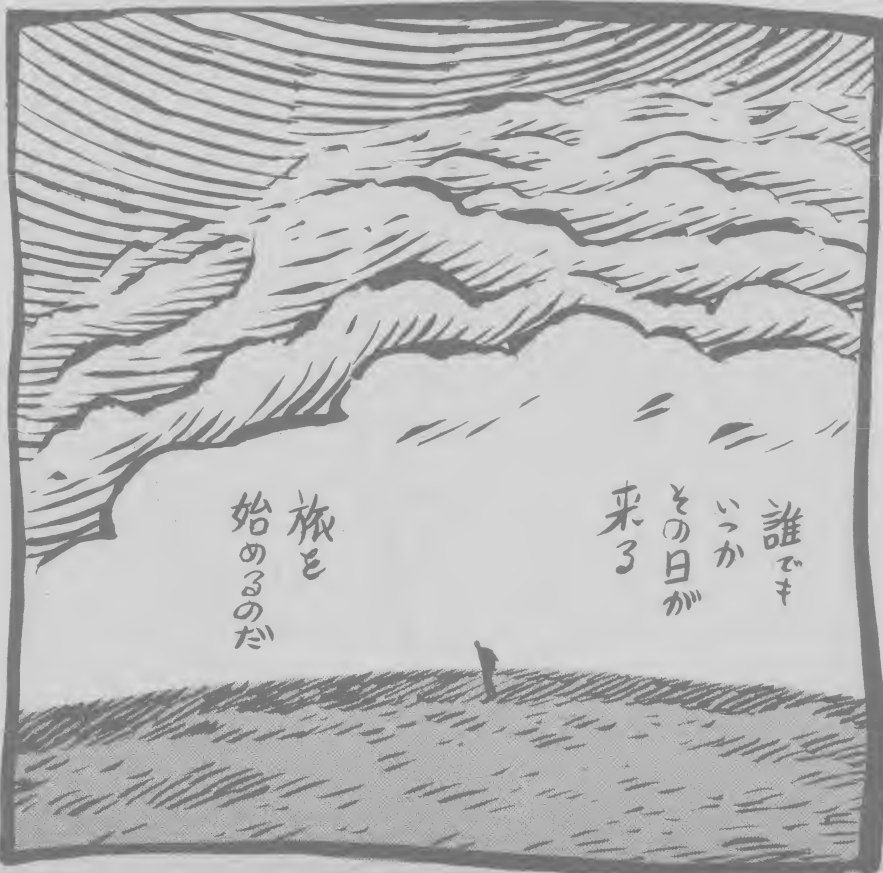
だいいち　その問いは
意味をなさない

人は偶然という
たまたまそうなったという

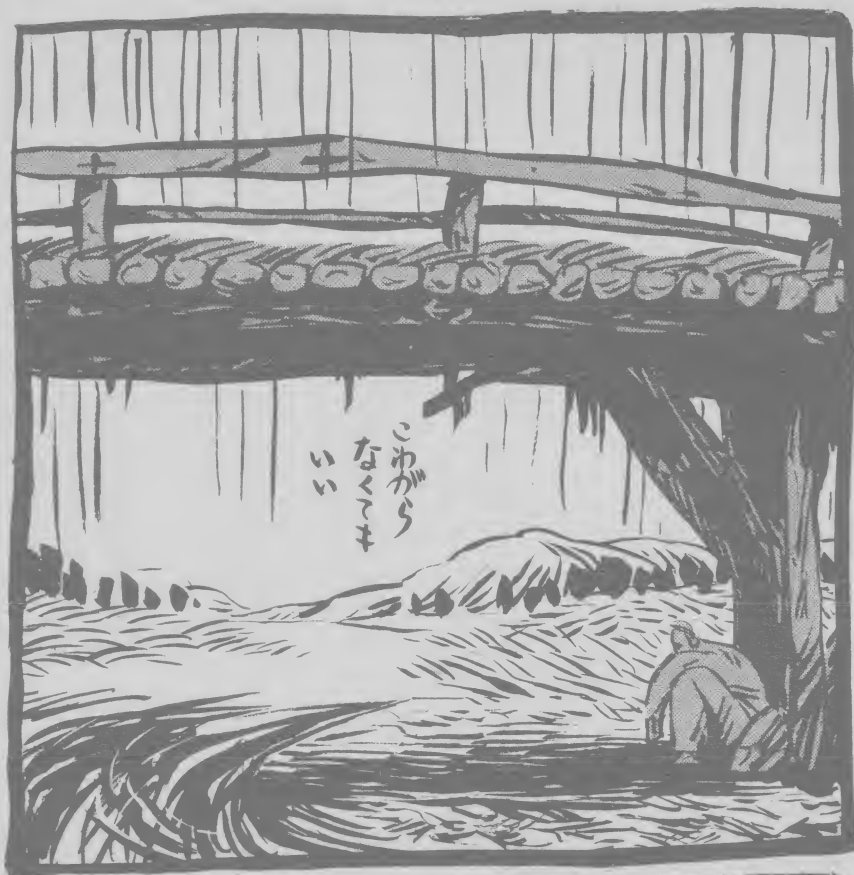
だが　たまたまにしろ　偶然にしろ
原因はある

奇蹟といわれることにおいてでさえ
因はあるだろう

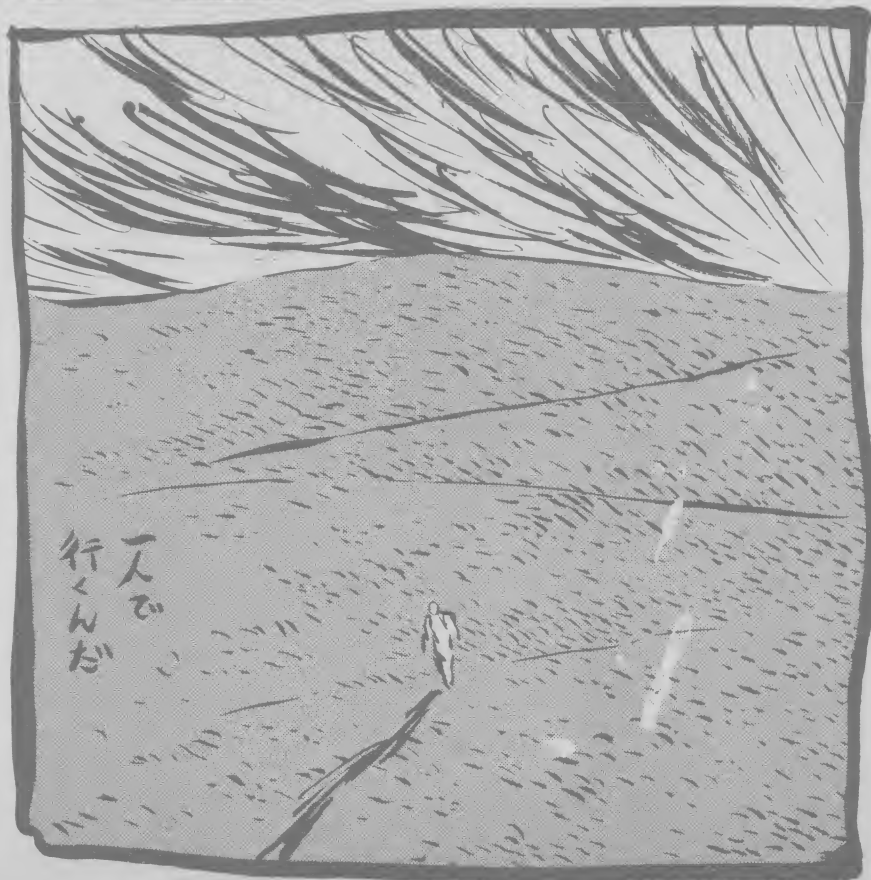
ただそれは 人知では
知り得ないのかも しれない

しかし因がないなどと
いうことはない

ありとあらゆるものを
在らしめているところの因
それを神と呼ぶかどうかは人の勝手だ

だがそれは存在する
この世界という果が存在するというのに
どうしてその因がないなどと
いえよう

こわがらなくてもいい

それを神と呼ぶのか
それを宇宙の法則というのか
それを紫とでもとなえるのか
それは勝手にやればいい

因は縁を得て 果を生じ
報を成す

因果応報というやつだ
縁については また別にかく

因が先か　果が先か
因は果に依り
果は因に依る

因と果は時をはさんだ
裏表

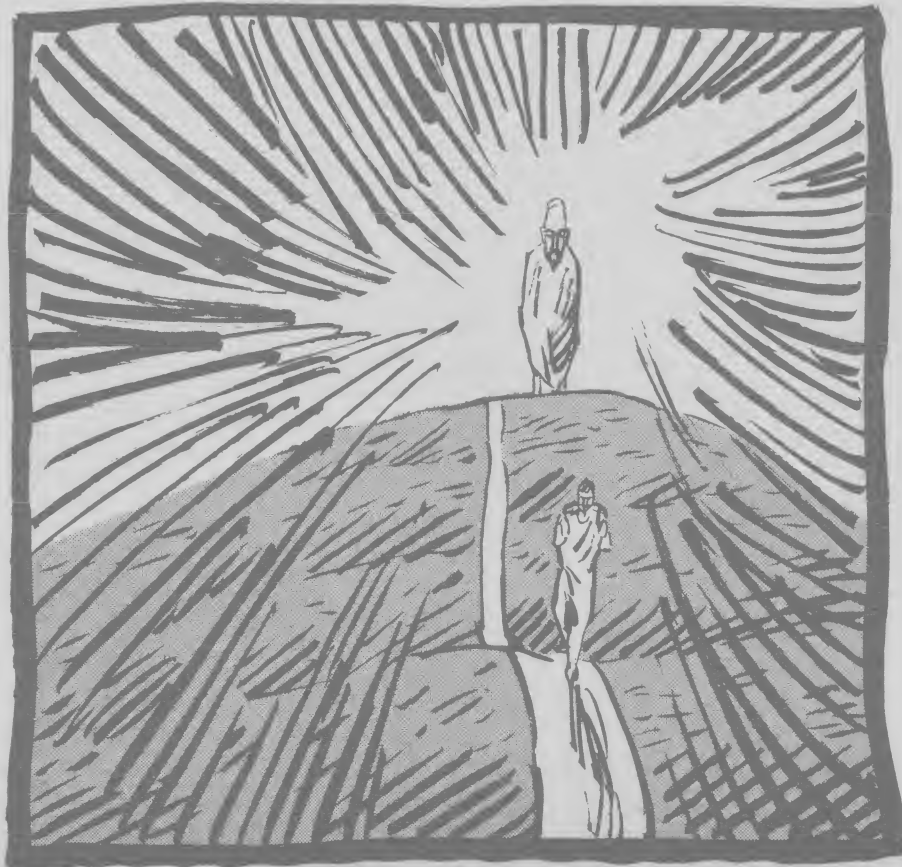
その相依るところのもの
それが無実体

釈尊はそう教える

虚構の関係

片方がなければ　また片方もなく
ただその関係性のみが
うごめく

それが この世
実体はない

十（プラス）と 一（マイナス）
あわせれば 〇（ゼロ）

0(ゼロ)から
＋(プラス)と－(マイナス)は生じる

丘の向うは
常に移り行く
おまえが再び
ここに
戻って
来るかどうか
わからない
だが
私は待っていよう

無より陰と陽が生じ
陰と陽は合わさって無に帰す

陰と陽に実体はなく
ただ相対感覚のみが
世界を成立させる

まず この世の虚構性を
理解しなければならない